

# スポーツ社会学研究の実践性と生活論

後 藤 貴 浩

## 1. 問題関心

スポーツを「する」ことの意義は、健康・教育・文化・地域活性化などさまざまな領域で主張され、その実践的効果を求める政策的、マネジメント的研究に多くの力が注がれてきた。その根底には、スポーツの拡大・成長が、人びとの生活を豊かにするという新自由主義的な発想とスポーツに対する過剰な価値期待があると思われる。このことは菊幸一（2012）の「スポーツの能力には様々な汎用性、応用性があることをスポーツ界が証明し、その能力獲得過程から個人の能力を正しく評価し活用するまでのキャリア全体について、スポーツだけでなく社会のモデルとできるような取り組みが必要である」という主張に端的に現れている。

しかし、スポーツの発展・拡大やモデル的（理想的）実践が必ずしも生活の豊かさに結びつくわけではない。筆者は、これまでのスポーツと生活に関する研究には二つの大きな問題があったと認識している。一つは、より多くの、より最適なスポーツ実践が、生活の豊かさに直結するという思想を前提とするため、スポーツを断続的に行なったり、中断したりする人びとの実践の意味が等閑視されてきたということ。つまり、「ダウンストリーム」の研究には手が付けられてこなかったということである。私たちの生活実践の様式は、さまざまな生活条件の変化に合わせて組み替えられるものであり、スポーツ実践も例外ではない。その場その時の生活条件に即して、スポーツ実践のあり様と意味も変化するのである。これまでのようにスポーツの価値を固定的に捉える限り、現実的・個別的なスポーツと生活の関係性について議論することは難しい。

もう一つは、肝心の生活の中身が議論されてこなかったという

ことである。人びとの生活は、さまざま要素（家族、経済状態、環境、ライフイベント、スポーツなど）の関係性のなかで成立している。それらを横断的（社会関係的）、縦断的（通時的）に分析することで、生活の内実に近づくことができるのである。これまでのようにスポーツと生活を並列的に置き、その関係性を議論するのではなく、生活を“まるごと”分析し、そのなかでスポーツ実践の意味を問い直すこと（松村和則，2006）が求められる。その時、社会学を中心とした生活研究が積み上げてきた手法と成果に十分に目配りする必要がある。

以上のような問題意識のもと、本稿では、環境社会学や農村社会学で精錬されてきた生活論に着目し、生活とスポーツに関する社会学的研究の実践性について検討することを目的とする。生活論の方法論的特徴については後述するが、本稿で生活論を取り上げる理由として、生活論が「人々がそのように見、理解している事実」を「事実」ととらえるという実践者（生活者）の立場に立つこと、生活者の営みを内在的に理解すること、そして生活の合理性を前提とすることから政策論へとつながる可能性がある（閻美芳，2021）ということを指摘しておきたい。

## 2. 生活論における生活分析

それでは、まず環境社会学の分野で生活論研究を牽引してきた鳥越皓之（2020）の見解を確認してみたいと思う。鳥越によると、生活論は日本固有のもので、日本の現場を歩く研究者の間では実態に合った便利なモデルとして評価されている。輸入科学を手掛かりに社会のあり様を論じていた日本の社会学では、現場に出かけて調査するという実践的調査法を持っていなかった。そこで、生活論を軸にして論理構成をしている民俗学に現場での調査法を学んだのである。柳田国男によって創設されたとされる民俗学は、庶民（常民）の生活実態から生活の工夫を学び取り、それを個々人の生きる施策に結び付けていくという面に主眼が置かれている。そして、「書かれざる史料」たる生活の古典・伝承による研究という特徴を持ち、「共同主観」を重視する。このことに

ついて鳥越は、「民俗学の生活論には、人びとの気持ちから入り、暮らしの論理を考えるという特徴がある。それを現在の科学論でいえば、客観主義ではなく、調査対象者と調査する自身の共同主観を大切にするという考え方になろう」（鳥越，2020：9）と述べている。このように鳥越は、民俗学にその調査方法を学んだ生活論は、調査対象者との共同主観を重視し、彼らの生活の工夫を学ぶという「実践性」に大きな特徴があるとしている。

また、生活論的立場からスポーツ研究に取り組んできた松村和則（2020）も、「もう一步、社会学研究が『現場』に近づけないか。もっと『人びと』に信頼を寄せて『実践』することができないか」（松村，2020：iii）と生活論の持つ「実践性」に共鳴する。しかし、松村は、「小さな共同体」の「主体性の可能性」（「ムラの実践的な可能性」）に期待しつつも、『言説の世界』の人に対象化された『人びと』は調査の段階で『諾』という装いを見せつつ、質問者の意図を察してやり過ぎしているときもある。『言い分論』（鳥越，1989）が扱う一步手前で、無言のやり取りが『人びと』の生活組織を再編し続け『相互転換』という想像力が発揮されることもなく、『不条理さ』をはらんだままの空間で長い時間が過ぎていく」と「動かないムラ」に悩むのである。このような鳥越とは異なる松村の現場認識については山本大策（2020）が指摘しており、後述することとしたい。さらに松村は、主知主義からの離脱ということから、定義しないで対象の研究を進めることの重要性を指摘する。しかし、このような言語中心主義から距離を取る方法は、結果的に言語を用いて表現する「言説の世界」にいる我々研究者に矛盾を突き付けることになる。それでも松村は、「生活する人びとの暮らしに寄り添い」ながら、「価値からの自由」を優先することでその「実践性」を捉えようとするのである。以上のような認識的立場に立ち、松村は「生活論的アプローチ」について、「豊富な資金で集めた『客観的』なデータを提示しようとするものではなく、自らの『経験』を踏まえて研究者としてその存在を賭して提案するモノグラフの記述である。換言すれば、『経験』による『切断』の一方法である」（松村，2020：96）と

述べている。

このような“松村生活論”について、経済学の立場から山本大策（2020）が、J・K・ギブソン＝グラハムの「多様な経済」論との比較を行っている。山本によると、J・K・ギブソン＝グラハムは、新自由主義にしてもそれを批判するマルク主義経済学にしても、その分析対象とされてきたのは商品生産のための賃金労働であり、それは「人間生活におけるモノやコトの生産と消費という実質的な経済活動のなかでは氷山の一角に過ぎない」と批判する。彼らは、ボランティア、相互扶助、地下経済、家政、自給自足等も含む活動を対象とすることを主張しており、このことは松村のムラ（地域）の活動をとらえる視点と共通しているという。さらに、両者を比較する理由として、ともに、外発的な発展論に対抗する論理を立てていること、そして「実践性」を重視していることを挙げている。

まず、山本は、松村と鳥越の違いについて以下のような指摘をしている。鳥越らの生活環境主義が開発主義に取り残された地域や組織における生活環境保全に前向きで創造的な地域や取り組みを対象としたのに対し、松村は開発主義が深く浸透した社会・地域に身を置き、「現下の『内発的』な実践の多様性や可塑性、あるいはその危険性まで射程に入れようとする」（山本、2020：27）というのである。住民の「創造的実践」を生活意識や生活組織の通時的な変化に位置付けて理解しようとする姿勢は共通するものの、松村は、開発主義が浸透した社会における人びとの実践の多様性・可塑性・危険性を射程に入れるようとするのである。さらに、生活環境主義が生活の維持と環境の保全を相互補完的なものとしてとらえるのに対して、松村は、生活条件の変化という外的ショックにより生活基盤が成立しなくなったムラを対象に広い意味での地域「経済」の再生を重視しており、この点がJ・K・ギブソン＝グラハムとの共通性となっているというのである。そして、“松村生活論”の「実践性」について、「自らもムラの『内側』に身を置き、『実践』への方途を探るという『手口』の確立が必要である」との主張を捉え、「構造を揺り動かす実践に身体を投

入すること」まで自身の課題として引き受けようとするところに大きな特徴があるという。その際、調査対象者との対話のなかに現れる生活者の言葉や感情の奥に主体性の再形成の契機を見出そうとする。このような、『『あるべき姿』や目標を提示して人びとを励ましたり、高みから啓蒙したりするのではなく、そこにいる人びとのかすかな心の動きを感じ取ろうとする』（山本，2020：31）姿勢が、J・K・ギブソン＝グラハムとの2つ目の共通点となっている。3つ目に、「多様な経済論」の「協働のポリティクス」と生活論における「抽象度をあげない努力」の近似性について山本は指摘する。遠大な構想や精緻な論理構築に注力するのではなく、「いま」「ここで」できることを集団的に実践し、「現実」を眼前に創り出し、成功と失敗を経験することでしか得られない経験的な知識の蓄積や「理論」の修正、刷新を行うということが、まさしく「抽象度をあげない努力」ということなのである。

このように、山本は、J・K・ギブソン＝グラハムの「多様な経済論」との比較を通して、“松村生活論”の特徴を、「実践的経験」の重視と強い「文脈依存性」にあるとしている。そして、松村の課題意識は、具体的な状況のなかで、「倫理的行為」を選び取り実行することのできる研究者を含めたアクターをどう育てるかということにあると指摘する。つまり、実践の現場において、どのような「知」やコンテキストが喚起されるか、その過程を記録、記述し、またその手法についてまで考察や議論を深める必要があるというのである。これが“松村生活論”の「実践性」の要諦であろう。

ここまで、環境社会学における鳥越の生活論、スポーツ社会学における松村の生活論、さらに、山本による“松村生活論”の解釈を確認してきた。鳥越、松村ともに「人々がそのように見、理解している事実」を「事実」ととらえ、生活者の営みを内在的に理解する（閻美芳，2021）という姿勢を共有しつつ、その「実践性」という点は異なっていることが分かる。相違点の一つは、「取り上げられるべき実践の現場」（面白い、創造的取り組み）のみを対象とするのではなく、松村は、生活条件の変化に対して人びと

が示す創造的なものに限らない抵抗、迎合、無視も含む多様な実践から、彼らの生活の論理を学び取ろうとするのである。そして、そのために研究者自らが身体を現場に投入し、「実践」の方途まで探り出そうとする点にも違いがある。松村は、「生活者の実践」を理解し、自らの存在を賭して提案する「研究者の実践」を模索するのである。

この“松村生活論”の「実践性」の可能性を、具体的な方法論として検討しているのが村田周祐（2021）である。生活論では、生活を捉える分析枠組みとして「いえ・むら」を設定し、無事に暮らし続けるため（生活保障）の実践のあり様を、人びとの生活意識や生活組織という側面から記述するという方法を取る。松村は、生活とスポーツに関する研究においても生活保障という点から特に「家族」（あるいは「いえ」的なもの）を分析対象とし、生活組織を固定的に捉えるのではなく、その通時的な変容に着目し「相互転換」による「生活組織化」（松村，2005）について検討するのである。「生活組織化」とは、生活保障を担う組織的活動であるが、生活の必要から組織化されたものだけでない。それは生活意識の具体的な現れであり、生活条件の変化に応じて常に変化するものである。村田によれば、松村の「生活組織化」は竹内利美の村落研究における「動的平衡論」に学んだものである。竹内は、「むら」の個別具体的な自然性や歴史性のなかで醸成された家や個人のつながりを類型化し、それら種々の生活組織がどのように組み合わせられたり転用されたり新設されたりするのかに着目することで、時代の変化のなかで「変わらないために変わり続けるむら」の姿を描いていたという。このことから、村田は、「動的平衡論」および「生活組織化」の発想は、移動が常態化し村外との関わりのなかに存立する現代の「むら」の“生活”の内実を描き出し、移動を前提に立案され続ける地域政策を「むら」の個性に応じて組み直し根付かせていくための視点を提供することが可能になると述べている。特に、生活意識が「いえ・むら」以外の様々な形態で顕在化したり潜在化したりすること、規則性（システム）というよりも創造性（適応力）に重きを置いていること

に注目すべきであると指摘する。

村田の主張は、現代社会で変化する「いえ・むら」における生活保障の重層構造に光をあてることへとつながる。同様の立場で、より「実践的」な研究に取り組んでいるのが、「修正拡大集落論」を唱える徳野貞雄（2014）であろう。「修正拡大集落論」は、集落を閉鎖的な空間構造としてとらえた統計的な分析枠組に依拠する「限界集落」論に対抗する理論として提出されたものである。徳野は、「（限界集落論的なアプローチでは）集落の外形的な統計上の変化はある程度とらえられるが、農山村住民の日常の生活構造の変容や生活欲求の充足度まではとらえにくい。よって、統計上固定された空間的な集落としての農山村はますます衰退していくという結論に陥りやすい。一方、われわれが開発したT型集落点検手法のアプローチでは、集落の外形的な変化を踏まえながら、集落住民が日常的に生活していくための個人レベルもしくは、世帯・家族レベルでの『現実的生活基盤』を分析していく」（徳野、2014：31-32）ことが可能になるとその重要性を述べている（括弧内は筆者）。つまり、外形的には限界集落構造と捉えられる集落であっても、現実には「近隣・近距離に他出している子どもたち（他出世帯）との相互扶助」が成立していると主張するのである。

竹内や徳野が示したような生活保障を補完し合う重層構造を実証する視点は、個人化・流動化した現代社会における生活とスポーツ研究にも重要な示唆を与えられられる。また、鳥越(2020)が言うように、「生きる」ということは「食べる」と「暮す」の両方を含むものであり、「スポーツとともに生きる」という生活実践においてもその両方の視点が必要になる。氏によると、身体活動は農作業などの生産だけにとどまらず、生産以外に目的化された身体活動が多様に存在しており、それは人間として充実して生きるという意味を持つものである。したがって、スポーツ実践における生活保障という場合には、この両方の側面を含みこんで分析する必要があり、このことが生活とスポーツの研究に生活論的アプローチを持ち込む一つの利点となる。

### 3. 生活論的アプローチの可能性

スポーツ社会学研究における生活論的アプローチを検討する前に、松村が指摘するこれまでの生活とスポーツに関する研究の課題を確認しておこう。氏は、現代の「競技スポーツ」を推奨する姿勢から離れて、生活を見据え「人びと」の側から考え直すことを求めている。社会も研究者も、スポーツを「消費」することに熱心なだけで、スポーツをめぐる様々な社会問題に実践的に向き合ってきたとは言い難いという。それは、現代社会におけるスポーツの世界の拡張と強大化が、その中に生きる人びとの愉悦を増大させ、問題を問題として見えなくさせているからであるとする。さらに、スポーツの制度化は民衆のスポーツを分断させ、「楽しむだけの人」「見るだけの人」へと成り下がる人びとを創り上げてしまうと指摘するのである。本来、研究者はこの分断された人びとの実践までも含みこんで分析することが求められる。そのような人びとはどのような人びとで、彼らにどのような構造的圧力が働き、どのような対応（抵抗・迎合・無視など）をしたのか、綿密に記述し記録する必要があるのである。その際、有効となるのが「生活の中でスポーツを考える」生活論的アプローチなのである。具体的には、スポーツを実践する生活者の衣食住を中心とした生活や家族・職場・地域・学校などの社会関係のあり様を、縦断的・横断的に分析し、そこにスポーツ実践の意味を見出していくことになる。このような方法について、例えばセカンドキャリア問題などにおいては、「現代の超高度化したエリートスポーツ選手の短期間の生活にフォーカスするには不都合な手法だろう」と松村は指摘しつつ、「少なくとも家族成員の生活と共に描き出すことを目指していることを知ればおのずと理解を得られる」とも述べている（松村, 2020:94）。さらに、生活論的アプローチの最大の強みは、「自らの『経験』を踏まえて研究者としてその存在を賭して提案するモノグラフを記述するという『実践力』にある」としている。「スポーツを語る人びと（スポーツ研究者）は、ほとんどが自らのスポーツ実践を問われ、スポーツ界の社会問題を自らの『問題』とすることはほとんどない（括弧内は筆者）」（松



村, 2020, :86) とスポーツ研究者の「実践」にも疑問を呈する。対象者である生活者の「経験」に寄り添い、そこから見いだされる「生活の論理」をすくいあげ提案する「実践力」を求めるのである。

以上のような松村の主張を踏まえるならば、生活論的アプローチは、生活の内側からスポーツを議論するものであり、スポーツによる生活の拡充やスポーツのための生活基盤の整備を目指すものではないことが分かる。そこではスポーツの多寡や高度化、制度化との一般的な関係が議論されるのではなく、個別具体的な場面でのスポーツを含む生活全体が議論の対象となる。その方法論的特徴がゆえに、スポーツ的社会関係と生活（「食べる」と「暮らす」の両方）との関係を議論することも可能となるであろう。また、これまで地域スポーツ研究で課題とされてきた親交的コミュニティがどのようにして自治的コミュニティへ移行するかということについても、生活保障の重層構造という視点から捉えることで、親交的コミュニティに内在する「生活の論理」という議論も可能となるのではなかろうか。

一方で、松村は生活論的アプローチの分析対象として「いえ」的な生活体を設定してきたが、個人化、流動化の著しい現代社会では個人レベルでの生活保障の分析対象をどのように設定するかという課題が残されている。氏<sup>1)</sup>によると、そもそも「生活」を捉える方法としては、農村、家族、都市の社会学で錬成されたものがあり、それは生活の枠組みとして「いえ」や「むら」などが実態として存在することを確認して、生活上の関係性を中心にみていくものであった。では、現代社会における生活とスポーツに関する研究では、どのような「生活体」を分析対象として措定することが可能なのであろうか。「主知主義からの離脱」という生活論の原理に立ち返るならば、現代社会の人びとがどのような生活体を創り上げているのかという点から生活のあり様を改めて見直さなければならないであろう。このことに関して、石岡丈昇(2012)の先駆的な取り組みを参考にすることができる。氏は、フィリピンのボクシングジムでのフィールドワークを通して、ス

スポーツを通じた生活保障空間が形成されていることを明らかにした。それは人道的な関係で成立しているのではなく、ボクシングに固有のマネージャー・ボクサー関係に働き動かされた社会関係的水準で創出されていると指摘している。

筆者は、これまで東南アジアの日本人プロサッカー選手の社会移動に関する研究（後藤，2019）や少年サッカークラブの運営に関する研究（後藤，2023<sup>1</sup>）に取り組んできた。そこでは、競争相手である選手やコーチ同士によるさまざまな情報交換や交流の実態が確認された。例えば、東南アジアの日本人プロサッカー選手の中には、専門のエージェントよりも SNS でつながった選手仲間の情報を信頼する者もいた。また、少年サッカークラブのコーチの中には、「サッカー人脈」を頼りに複数のクラブを渡り歩き「サッカーのある生活」を維持している者もいた。しかし、彼らの関係性がどのように構築され、彼らの生活にどのような意味をもたらしているのかということは不明であった。この課題を明らかにするうえで、石岡の取り組みは参考なると思われる。一方で、氏の研究ではボクシングジムという集団内の相互関係に着目しており、集団への帰属が前提となっている。サッカー選手やコーチの社会関係は、SNS で「つながる」など組織化された集団ではないことから、スポーツ社会における生活保障空間の重層構造について新たな知見が得られる可能性もある。

加えて、スポーツ社会における生活保障の問題を取り扱うということは、以下のような社会課題への実践的対応へとつながる可能性もある。近年、資本主義下における成長主義や近代的個人主義の限界が指摘されるなか、行き過ぎた資本主義・開発主義にブレーキをかける共同性やコミュニズムの重要性（松嶋健，2019、斎藤幸平，2020）が指摘されるようになった。このような主張は、「より早く、より高く、より強く」を標榜し、競争主義、自由主義、能力主義の象徴的領域であるスポーツの世界においても必要とされるのであろうか。そして、仮に生活保障に関わるようなスポーツにおける共同性やコミュニズムが形成されるのであれば、それはどのような社会関係の下で現出するのか。生活論的アプローチ

はスポーツ社会のこのような課題においても実践性を発揮するものと思われる。

## 注

- 1) 生活とスポーツに関する研究会における松村氏の発言による。

## 文献

- 閻美芳, 2021, 「生活論からみた中国農村の人びとの生活合理性——都市化・流動化に生きる山東省閭家村を事例に」『日本村落研究学会第69回（2021年度）大会』テーマセッション「生活研究の射程—生活の視点から現代のムラを捉える」発表資料
- 古川 彰, 2004, 『村の生活環境史』世界思想社.
- 後藤貴浩, 2021, 『サッカーピラミッドの底辺から—少年サッカークラブのリアル』道と書院
- 後藤貴浩, 2019, 「シンガポールで『プロサッカー選手』となった若者たち」『サッカーのある風景—場と開発、人と移動の社会学』晃洋書房
- 石岡丈昇, 2012, 『ローカルボクサーと貧困世界—マニラのボクシングジムにみる身体文化』世界思想社.
- 菊 幸一, 2012, 「スポーツ選手のセカンドキャリア問題」『筑波大学セカンドキャリアプロジェクト「Top Athlete Career Support」』（2017年3月3日取得, <http://www.shp.taiiku.otsuka.tsukuba.ac.jp/tacs/?p=358>)
- 松村和則, 2005, 「ムラとともに環境創造を考える—実践としての生活環境主義再考」『年報村落社会研究』41.
- 松村和則 編, 2006, 『メガ・スポーツイベントの社会学—白いスタジアムのある風景』南窓社.
- 松村和則, 2020, 「スポーツ化する社会への生活論的アプローチ—白いスタジアムと『小さな共同体』つなぐために—」松村和則・前田和司・石岡丈昇 編『白いスタジアムと「生活

- の論理」ースポーツ化する社会への警鐘ー』東北大学出版会。  
 松嶋健, 2019, 「ケアの共同性ー個人主義を超えて」松本圭一郎・  
 中川理・石井美保 編『文化人類学の思考法』世界思想社。  
 村田周祐, 2021, 「変わらないために変わり続けるムラー竹内利  
 美の動的平衡論から迫る移動の時代における宮城県七ヶ宿  
 町湯原と千葉県鴨川市大浦の生活ー」『日本村落研究学会第  
 69回（2021年度）大会』テーマセッション「生活研究の  
 射程ー生活の視点から現代のムラを捉える」発表資料  
 斎藤幸平, 2020, 『人新世の「資本論」』集英社新書。  
 徳野貞雄, 2014, 「限界集落論から集落変容論へー修正拡大集落  
 の可能性」徳野貞雄・柏尾珠紀『T型集落点検とライフヒス  
 トリーでみえる家族・集落・女性の底力ー限界集落論を  
 超えて』農山漁村文化協会。  
 鳥越皓之, 2020, 「生活論とは何かー社会学・民俗学の立場から」  
 松村和則・前田和司・石岡丈昇 編『白いスタジアムと「生  
 活の論理」ースポーツ化する社会への警鐘ー』東北大学出  
 版会。  
 山本大策, 2020, 「生活論と『多様な経済』論の狭間で」松村和  
 則・前田和司・石岡丈昇 編『白いスタジアムと「生活の論理」  
 ースポーツ化する社会への警鐘ー』東北大学出版会。

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 18K10859 の助成を受けたものである。